

第1回教育再生懇談会
議事録

内閣官房教育再生懇談会担当室

第 1 回教育再生懇談会議事録

日 時 平成 2 0 年 3 月 2 5 日 (火) 17 : 15 ~ 18 : 43

場 所 総理官邸大会議室

議 事 次 第

1 . 開 会

2 . 福田内閣総理大臣挨拶

3 . 自由討議

4 . 閉 会

山谷総理大臣補佐官 皆様、ありがとうございます。ただいまより第1回教育再生懇談会を開催いたします。

座長選出までの間、議事進行を務めさせていただきます内閣総理大臣補佐官の山谷えり子でございます。よろしくお願いいたします。

委員の皆様方におかれましては、御多忙のところ御出席賜りまして、誠にありがとうございます。

それでは、まずこの懇談会の座長を選出していただきたいと思います。教育再生懇談会開催の閣議決定では、「懇談会の座長は、互選により決定する」ということになっております。委員の皆様方におかれましては、座長の選出をお願いしたいと思いますが、どなたか、若月委員。

若月委員 初等教育から大学教育まで幅広くかかわっていらっしゃいます安西先生に是非座長をお願いできればと思うのですが、いかがでございましょうか。

(「異議なし」の声あり)

山谷総理大臣補佐官 御異議なしということでございますので、安西委員に座長をお願いいたしたいと思います。恐縮でございますが、安西座長は座長席のほうにお移りいただけますでしょうか。

それでは、ここからの議事進行は安西座長をお願いしたいと思います。

安西座長、よろしくお願いいたします。

安西座長 それでは、私のほうで議事を進行させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、会議の運営に関しまして、配付資料にありますとおり、会議の内容は会議の後で議事要旨、議事録等により公表するということにさせていただければと思いますけれども、よろしゅうございましょうか。

(「異議なし」の声あり)

安西座長 ありがとうございます。

それでは、そのようにさせていただきます。

それでは、ここで会議の開催に当たりまして、福田内閣総理大臣から御挨拶をいただきたいと存じます。

(プレス入室)

安西座長 それでは、福田総理、よろしくお願いいたします。

福田内閣総理大臣 どうもお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。今回、教育再生懇談会の委員をお願い申し上げました。御多忙の中、お引き受けをいただきまして大変ありがとうございます。まず、御礼申し上げます。

また、野依委員、池田委員におかれましては、教育再生会議に続き、本懇談会へも御参加をいただき、こういうふうなことでもございます。重ねて御礼申し上げます。

教育の第一線で御活躍の方々に多数御参加いただきまして、ありがとうございます。今

国会の私の施政方針演説でも、我が国が直面するいろいろな課題、将来を見通して何が大事かという、やはり人づくり、人間そのものをどうやってつくっていくかと、こういうことが大事なんだということを申し上げておるところでございます。これはもう皆さん、そういうふうにしてもらっていただくことでございます。明日の日本を担う若者を育てる環境をつくることは、これは私ども大人の、この社会の責任なんだというふうに思います。

そして、「自立して生きる力」と「共に生きる心」を育むために学校のみならず、家庭、地域、行政が一体となって、教育の再生に取り組むということが大事でございます。

こういうことから、教育再生会議に引き続きまして、内閣としてこの懇談会を開催することといたしたわけでございます。

この懇談会におきましては、1月末に最終報告を取りまとめた教育再生会議の提言のフォローアップを行うということがございますが、それとともに、21世紀にふさわしい教育の在り方についての論議をお願いしたいと考えておりますが、この機会に若干私の考えを申し上げたいと思います。

第一に、子供たちが勉学初め何事にも意欲的、主体的に取り組むための環境や教育の在り方について御議論をいただきたいと思います。最近では携帯電話とかメールで意思疎通をするといったようなことがございまして、物があふれ、便利さを享受し過ぎている豊かな社会でありまして、子供たちの教育に環境的に困難な面があるというふうに思っております。

それから、そういう中で、有害情報対策といったような子供たちを取り巻く環境問題、それからネット社会にあって、子供たちの考える力や、それから他者とのコミュニケーションを行う力を養う教育の在り方、更には家庭教育、幼稚園、保育所を含め、就学前の幼児期の教育の在り方といったようなことについて御議論をいただきたい。

第二に、大学の全入時代がやってきたということでありまして、各方面から学生の学力低下が危惧されているという状況があります。いかに若者の学力、能力を高め、国際的に通用する人材を育成していくかということが、今、問われているのではなからうかと思えます。大学全入時代における、高校教育、大学入試、更には大学教育そのものの在り方、また、我が国の国際競争力向上の観点から、留学生の受入れの拡大や英語教育の在り方といったようなことについても御議論をいただきたいと思えます。

第三に、冒頭申し上げましたように、教育再生会議の提言のフォローアップをお願いいたします。教育再生会議では、既に教育全般にわたって4次にわたる貴重な報告を取りまとめていただいております。その成果が今後活かされるように、この懇談会でフォローアップしていただくことが重要と考えております。この懇談会での御議論を踏まえまして、内閣として引き続き教育再生に真摯に取り組んでまいりたいと思えます。

委員の皆様の貴重な御経験、高い御見識を活かして、実りある御議論を展開していただけるものと強く期待を申し上げます。

どうぞ御協力のほどよろしくお願いいたします。

以上であります。

(プレス退室)

安西座長 総理、ありがとうございました。

それでは、続きまして、町村官房長官、また、渡海文部科学大臣から御挨拶をいただければと存じます。

町村官房長官、よろしくお願いいたします。

町村官房長官 今、総理からのお話に尽きるかと思えます。今総理がお話のような問題意識で、また、今日はいろいろな多様な先生方も御参加をいただきましたから、先生方からのいろいろな御関心の向きもお述べをいただきまして、その中で興味あるテーマ、重要なテーマを取り上げていただければと思います。私も2回文部大臣を務めた経験もごさいます。そんなことで、初当選以来、ずっと教育問題には一番関心を持って取り組んできたものでございますから、この懇談会の中で先生方にいろいろまた教えていただき、貴重な御意見をいただき、そしてそれを実際、政策の面でも活かせるものはなるべく早く実現をしていきたい、そのために最大限の力を尽くしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

安西座長 よろしくお願いいたします。

それでは、渡海文部科学大臣、よろしくお願ひします。

渡海文部科学大臣 文部科学大臣の渡海でございますが、もうお2人の話に尽きるということでございますが、今日は朝から実は6時間コースで、参議院で私の所信に対する質疑というのをやっておりまして、その中で4人に聞かれたのが、この懇談会と中教審の関係はどうなるんだという話でございました。山谷さんも座っておられましたからよくわかりでございます。

私はこういうふうにお答えをしております。中教審というのは、こちらから問題をきちり設定をして、このことについて有識者の御意見をいただきたいという、そういう諮問をして答申をいただくという法令に基づいた機関であると。

また、懇談会というのは、大所高所といいますか、幅広にそういう枠にとらわれないでやっていただくという意味で大きな違いがありますと。もちろん意見がねじれることだって時には過去においてありましたと。しかし、それはそれでいいんですという言い方をしまりました。

中に入って一番汗をかかなければいけないのが私の今いるポジションだと思ひながら、私は、教育は百人百様でございますから、そういう意味でやはりいろいろな議論があつていいんだというふうに思っております。そういう意味で、総理のほうからも問題意識といいますか、考え方の御提言があつたわけでございますけれども、どうか委員の皆様方の間で闊達な議論が行われまして、また貴重な御提言もいただければというふうに思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

長くなって恐縮ですが、もう既に目に触れていると思ひますが、私どもは今、学習指導

要領の改訂というのをもう間もなく出させていただきます。それと同時に、これは座長にも御苦勞をいただいておりますが、教育振興基本計画、これは第1号でございます。基本法を受けて、初めての試みとして、この10年間の教育を見越して、5年間の具体的な計画をつくるという作業をしております。

こういったことにも時間的な関係は直接はないかと思えますけれども、またいろいろな御意見も聞きながら、答申もいただき、私も参考にさせていただきながら、これから頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

安西座長 ありがとうございます。

それでは、次に総理官邸からの出席者を御紹介させていただければと思います。

大野松茂内閣官房副長官。

それから、岩城光英内閣官房副長官。

そして文部科学省から、池坊保子文部科学副大臣に御出席いただいております。

それでは、ここで私のほうからも一言だけ御挨拶をさせていただければと思います。

まず、この教育再生懇談会を開いていただきました福田総理に、国民の一人として、皆様もそうだと思いますけれども、深く感謝を申し上げたいと存じます。

教育の問題というのは、全国民が関心を持つ、また日本のこれからにとって極めて大きな課題だというふうに認識しておりますけれども、今、総理の言われました子供たちの問題、また高等教育の問題、それから教育再生会議の提言をフォローアップしていかなければいけない、これらのことすべてとても大事なことでございまして、また、官房長官また文部科学大臣がおっしゃられたことにつきましても、大変大切なことだというふうに認識、理解をしております。

教育というのは、お一人お一人いろいろな見方がある。渡海先生もおっしゃいましたけれども、そのとおりであります。一方で、評論を超えて実現を図っていかなければいけない、そういう時期に来ているというふうにも思います。

それにしては教育の問題というのはいろいろなことで、どれか一つ取り上げて、それを達成すればそれで済むというものではない、いろいろな関係がいろいろなところにありまして、そういう中で、やはりこれから教育の問題は、私は地域の活性化にも関係がやはりありますし、日本の国力を上げていく、日本の再生、活性化にも直接間接的に大きくつながるものだというふうに思っておりますので、是非この懇談会、メンバーの皆様におかれましては、よきチームワークを持って前向きに検討して、是非実現できるものは実現していくように一緒に進めさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

それでは、続きまして、今日は第1回目でもございますので、総理の御挨拶の中でも触れられましたこの懇談会の趣旨、テーマ、更には官房長官、文部科学大臣からの御発言も踏まえまして、委員の皆様にご自己紹介も兼ねて順次御発言をいただければと存じます。大変恐縮ですが、それぞれ5分程度でお願いできればと思います。

それでは、まず赤田英博委員にお願いをいたします。

赤田委員 皆さん、こんばんは。日本PTA全国協議会会長の赤田でございます。

全国1,000万人会員を代表いたしまして、この場にこのような機会をいただいておりますことに、まず深く感謝を申し上げたいと存じます。そしてまた、身の引き締まる思いもしております。

ただいま総理のほうからいろいろお話を伺いまして、私も子供に一番責任のある保護者としてしっかりと子供達の将来に責任を持ってまいりたいと考えております。今、いろいろな形で教育環境の問題を深く憂慮しておりまして、有害図書を含め、それから携帯、インターネットの問題等々につきまして、大人の責任として我々がどうあるべきか、しっかりと議論してまいりたいと考えておりますので、よろしくお話を申し上げたいと思います。

以上でございます。

安西座長 それでは、池田委員。

池田委員 池田でございます。再生会議から引き続き御指名をいただき、大変ありがたく思っております。

総理からも力強いお話をいただきましたが、再生会議では最終報告におきまして、提言のフォローアップを総理にお願いさせていただいたわけでございます。それが今日このような形で出発をさせていただいているということに、まずもって御礼申し上げたいと思います。同時に、フォローアップのみならず、今日の教育環境におけるいろいろな問題点について更に積極的に検討を、というお話も頂戴し、委員の一人といたしまして、私自身、大変大きな責任も負っているということを強く感じさせられております。

もう一点、総理に御礼申し上げたいことがございます。これはプライベートなことかもしれませんが、私が副会頭を務めさせていただいております東京商工会議所が創立130周年を迎え、昨日、記念式典が開催されました。式典には大野官房副長官にご出席頂き、総理からのメッセージを御披露いただきまして、一同大変うれしく思っているわけでございます。

申し上げるまでもなく、商工会議所の初代会頭は渋沢栄一翁でございます。渋沢栄一翁は御承知のように、経済と道德の合一説を強く主張しておられた方でございます。私も「初心に返る」という意味で、経済と道德の合一ということを企業活動の中でも、あるいは地域づくりの中でも大変重要な考え方としまして、今一度正面に据えていく必要があると思っております。商工会議所の創立の精神はそこにあるような気がしてなりません。創立130年を機にあらためて「初心に返る」ことが大変重要であろうと強く感じさせられております。

「強く感じさせられている」といいますのは、今日の世情、あるいは今日の経済社会というものが必ずしもそうならないということに尽きるからでございます。

経済と道德の合一ということを、既に経済活動を行っている経済人に、あるいは社会

人となってはじめて、道徳の重要性を唱えましても、これではもう遅過ぎると思います。

やはり幼児教育から初等教育、高等教育に至るまで、この辺のことを常に意識して、学校教育の中に強く落とし込んでいく必要があるのではなからうかと思います。特に道徳教育と申しますものは、私は、幼児期の家庭内教育から強く落とし込んでいかない限り、成長しましてから道徳の重要性を唱えましても、それでは難しいのではないかと思います。

こうしたことにつきましては、総理も再生会議の中でいろいろ御発言をいただいておりますので、これからこの懇談会で更に中身を詰めさせていただければ大変ありがたいと思っております。

以上でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

安西座長 それでは、小川委員、お願いします。

小川委員 東京大学の小川です。よろしくお願いします。

前の教育再生会議では教育を専門とする研究者がいなかったことを言われたこともありましたが、今回、主に教育行政とか教育政策の専門的な研究をこれまでしてきた立場から、できる限り議論にはエビデンス・ベースを大切にしたいと思っています。よろしくお願いします。

今日参加に当たって、あらかじめやはり教育再生会議のこれまでの報告やフォローアップのためのチェックリスト等々に一応目を通してきたんですけれども、基本的にはもう主要な問題の整理というのは、前の教育再生会議のところで、既にほとんどピックアップされ整理されているかなという印象を持ちました。

あとはプライオリティをどう付け、それを具体的などういうふうな手法で具体化していくかという、その辺のところにあるのかなというような印象を持ちました。例えば、直ちに実施に取りかかる事項等々についても、かなり具体的な実現の手法というか、方策が明らかなものも多いのですが、もう一方では、例えば学校の適正配置の推進等々に見られるように、これを実施していく上で、具体的にどういう手法で、どういうふうな施策でこれが実現できるかどうかというのは、まだ抽象度の高い事項もかなりありますので、恐らくフォローアップをするといった際には、そうした問題にもかなり時間を割いてやっていかなければならないのかなというふうに印象を持ちました。

あともう一つ、私の専門は主にこのフォローアップチェックで言えば、教員の質の向上とか、教育システムの改革のところですが、この問題を考えていく際には、やはり1990年代以降推進されてきた地方分権の改革も既に10年ぐらいたちますので、この10年間の分権改革の中で、自治体の教育行政の実態や、学校の実態がどうなっているのかという、その辺の検証を踏まえた上での議論というのが必要なかなと考えています。

例えば、ここのフォローアップの直ちに実施すべき事項一覧にも、校長の裁量・権限の拡大とか、学校の自立化等々のことが書かれておりますけれども、私のフィールド調査等々の経験からすると、これはもう1997年、98年の中教審の答申でも言われて10年近くたっているんですけれども、残念ながらこういうふうな学校レベルの改革というのは、今日

参加の品川のようなところは進んでいますけれども、多くの学校ではまだまだ進んでいません。

なぜそれが10年たって進んでいないのかというふうなことは、やはり分権改革のこれまでの総括を踏まえた上でのかちんとした議論が必要なのかなと思います。特に検討を開始すべき事項では、市町村教育委員会への人事権の委譲等々がありますけれども、これは教育行政だけの問題ではなくて、一般行財政を含めた分権改革の今後の在り方も含めて、かなり広範囲な問題整理の中でやっていくべき問題で、道州制を含めて、今後の国の分権改革の在り方とかなりリンクしたテーマですので、それがこの教育再生会議の懇談会の場でどこまで踏み込んで議論できるかどうかわかりませんが、是非その点も意識してやっていきたいと思っています。

それと、ちょっと長くなりますけれども、もう一つの大きな問題は、先ほど総理のほうからもお話しがありましたけれども、やはり少子化の中での子育て経費の負担増という問題をどう考えいくか、教育費の経費負担の在り方はどうするかというのは、日本の幼児教育、私立学校を含めて、学校体系の在り方にもかかわる大きな問題ではないのかなというふうに思っています。

今、いろいろな調査・統計を見ても、子供を0歳から4年制大学を卒業させるまでの子育て経費というのは、全て国公立の節約コースで約2,600万、医科歯科系とかでは約4,000万円から5,000万円かかるというふうなことです。普通のサラリーマンの生涯所得賃金は大体3億ぐらいですけれども、そこから社会保障費、税金、その他生活必要経費を除いたいわゆる可処分所得というのは大体7,000万前後だというふうに試算されています。可処分所得が7,000万前後で、子供1人当たり経費、子育て経費が3,000万となると、単純計算では普通のシングルインカムの家庭では1点何人しか子供を育てられないというふうな実態もありますので、この数値から見れば少子化はやむを得ない状況であります。こうした問題を考えると、子育て経費をどうするかというのは、先ほど言ったように、少子化対策としても、幼児教育から大学、私学の在り方まで含めて大きな問題ではないかと。これはやはり21世紀の早い時期に何らかの方向性を出すべき大きな問題なのかなというふうに考えています。

他にもいろいろ問題はありますけれども、主に強く感じている問題意識だけを少し述べさせていただきます。

ありがとうございます。

安西座長 それでは、木場弘子委員、お願いします。

木場委員 木場でございます。この度はよろしく願いいたします。

今回のメンバーは半分ぐらいの方が中教審にも籍を置かれているということで、かなり専門的な知識をお持ちの方が多いと思うのですが、私は逆に母親の立場や、生活者の立場で参加したいと思っています。

母親と申しますのは、今日中学1年の長男が終業式を迎えまして、成績表を持って帰

りまして、母親的に厳しい状況でこの席に臨んでおりますけれども、そのような立場でございます。そのほかに自分の中で教育と関連する部分を探り出してみますと、長男が小学1年ですから、7年ほど前から地元の教育委員会に籍を置いております。それから、同時に母校であります千葉大学教育学部の教員養成課程で表現法についての講義をさせていただいております。

ということで、私は総理の先ほどのお話の中では、コミュニケーションの重要性について、家庭でも教育現場でも私なりに意見を述べさせていただければと思っております。

1つだけ例を挙げさせていただきますと、総理も先ほど有害メディアの話をしていらっしゃるかもしれませんが、家庭の中のコミュニケーションもメディアと絡んで問題があるように思います。例えば家族4人が一緒に暮らしているとはいっても、ではお互いに目を見て向かい合っているかという部分で言うと、モニター症候群とかディスプレイ症候群という言い方をしますが、それぞれが、人と人が向き合っているのではなくて、お父さんは早く帰ったと思ったら残業でパソコンのディスプレイに向かっている。お母さんはドラマか何か見ている。お姉さんは携帯メールに熱心で、弟さんは小さい携帯のゲームをやっている。だから、一つ屋根の下にいても、コミュニケーションがとれているかという部分で言うと、難しいなというふうに感じております。

私もメディアの人間なのですが、そのメディアが人と人のコミュニケーションを妨げるようではいけないと思いますので、その部分で前回の会議の提言書を全部拝見いたしましたけれども、フォローアップリストの中でも、携帯電話のフィルタリングの義務づけのように、文部科学省だけでは対応できないような、各省庁にまたがっている案件は連携して子供たちを救わなければいけないと思う。こういう案件は是非強力に推し進めていただきたいという気がいたしております。

あとは、大学で教えておりまして、未来の教師に関して感じますのは、やはりまじめでお勉強はできるのですが、フリートークというか、臨機応変さとか、あと自己表現能力、コミュニケーション能力、相手の気持ちを知ろうとする気持ちとか、自分を分かってもらうというそういう熱意みたいなものはちょっと最近足りないと感じております。この後、この提言にもありますように、教員の評価を第三者がしていきますよね。恐らくそのうちにお子さん自身がしたりとか、親御さんがしたりとか、そういう時代も来ると思いますが、そういうときにやはり自己表現能力がないと、例えば保護者会などできちんとしゃべれないとか、あたふたしてしまうと、それだけでこの先生は統率する能力がないという烙印を押されて、それが給与に反映されてしまうと大変なことになってしまうので、非常に教員の評価というのは、難しい問題であり、教員はもっともっと腕を磨かなければいけないという気がしております。

最後になりますが、今回入れていただいた懇談会の他にも各省庁さんで委員をやらせていただいておりますけれども、どちらかというと、アナウンサーでございますので、広報的な立場、役割を仰せつかることが多いのですが、大体の委員会は国民がよく知らない

こと、例えばエネルギー分野でしたら、エネルギー自給率4%ということはほとんどの国民が知らないから知らせましょうとか。

広報的には、ややもすると前身の会議、私がテレビで拝見したところで、個人的に言ったことが会議の意見になってしまったりとか、あと親学など、きっと本当の趣旨はもっと違ったと思うのですが、国からそんな子育てまで押しつけられたくないとかいうふうに随分と意図と変わったふうに伝わる人が多いと思いました。これからこちらのフォローアップをしたり、新しい提言を出していくときに、きちんと正しい情報が正しく伝わるような、そういった努力と言ったら変ですけども、何かお役に立てるところがあればというふうに考えております。

以上、今考えるところを申し上げました。

ありがとうございました。

安西座長 それでは、篠原委員、お願いします。

篠原委員 篠原でございます。

ここにいらっしゃるメンバーの中で、最も専門性が低い立場だと思いますけれども、逆に私はその立場を逆に大事にしまして、いろいろお話、御提言をさせていただきたいなというふうに思っております。何か、ちまたではもう教育改革は終わったのではないかと、再生会議も終わったし、新学習指導要領も発表になっているし、安倍さんに比べて福田さんはどうも教育に熱心ではないのではないかと、こういうことがよく言われるので、私はそんなことはないと申しております。

これは幸か不幸かわかりませんが、私は今、たまたま6歳の子をこの歳で、抱えています。そのせいでいろいろなことを感じるんですけども、福田総理が官房長官のときだったと思います。たまたまうちの子供とばったり会ったときに、お父さんみたいに色黒になっちゃだめだよと言って頭をなでてくれましたけど、おかげさまで色白になりました。そういう優しさを非常に持っている方でございますから、教育に不熱心なんていうことは私は絶対ないというふうに信じてこの会議に参加をさせていただいております。

先ほど池田さんから、あるいは木場さんからもお話があったんですけども、教育のポイントというのは幾つかあると思うんです。私は幼児教育がまず大事。それから、やはり大学・大学院でエリートをどうやってつくっていくか、この二つが私はもう絶対的にこれからの日本の教育の中で重要なのかなと思っています。

今日は幼児教育に絞って若干意見を述べさせていただきます。幼児教育について、教育再生会議が打ち出した方向性、ベクトルというのは、私も基本的に賛成でございます。

特に、徳育の問題ですね。先ほど木場さんが親学の話もされましたけれども、徳育と言うとどうしても抵抗感というのがいろいろあるんだろうと思います。しかし、私はやはり今の若いお母さんやお父さんたちに任せ切れない部分をいろいろな形でカバーしていくことは必要だと思うんです。まだまだ日本のしつけ教育というのは私は捨てたものではないと思うんです。

というのは、この間ちょっと聞いたんですけれども、カタールの政府が学校をつくりたいと言ってきているというんです。日本の子供たちが非常にしつけがよく行き届いている。それをカタールの子供たちに学ばせたい。そのために、学校をつくってくれないかというんですね。まだまだそういう日本のしつけ教育というのは世界的には評価されているわけですから、それに是非力を入れて、やはり自立という、自分で立つということは自分を律する自律とイコールであるということをよく教えていく必要があると思うんです。

それで、教育再生会議の中でもう少し踏み込んでほしかったなと思いますのは、幼児教育の中で、池田さんもちょっと触れられたが、家庭教育の面です。やはり家庭教育のウエートをもっと高めていかないと、学校ばかりに、あるいは地域ばかりに頼りにしていくというのは無理だと思うんですね。

小淵さんが教育改革国民会議をつくったときに、いいことを言いましたよ。子供の教育よりも親の教育が先だということを言いました。やはり子供というのは親の鏡だと思うんですね。親学の問題も含めて、家庭教育はどうあるべきか、もう一度掘り下げる必要があると思うんです。

その中で言いますと、私は専業主婦というものの役割がもっと評価されていいのではないかと感じています。すぐ行政的にワーク・ライフ・バランスという話ばかりに行くんですけれども、1,300万人いる専業主婦の人たちは非常に孤独感を持っていて、アンケート調査をやりますと、育児ノイローゼが一番高いのがこの人たちなんですね、むろん、働いている方はそれなりに大変だけど、子供から離れてチェンジ・オブ・エアーができるという面もある。

その点、専業主婦の人たちは朝から晩まで子供たちに向き合っているわけですから、本来なら一番、子供の家庭教育をしやすい立場にある。ところが、育児ノイローゼになる率が最も高いのもこの人たちなんですね。こういう人たちをノイローゼから解放して、どうやってエンカレッジをさせていくか。これが私は家庭教育、幼児教育の1つの大事な柱になるのではないかなというふうに考えています。これはまた少子化対策にもつながる話だと思っておりますので、そういう気持ち、意見を持ちながら、またこれから随時考え方を述べさせていただきたいと思えます。

もう一点、私は国際化は非常に大事だと思うんですけれども、同時にやはり国内化というか、国内のことをよく知った上で国際人にならないとダメだと思うんです。単に語学ができればいいというだけの国際人になっては困るという認識を持っております。

どうぞよろしく願いいたします。

安西座長 それでは、菅原委員、お願いします。

菅原委員 立川市立第九小学校で小学校の教員をしております菅原と申します。

今回、このような大事な会議にお呼びいただきまして、また私は特別支援学級の担任をしております。障害のある子供たちと学んでおりますが、そのような(弱い立場の)ものを担当している者を呼んでいただきまして、本当にありがたく思っております。

本校でも今日卒業式を終えてまいりました。私が担当している障害のある子供たちもお友達の中に入って、一緒に卒業、巣立っていきましたが、本当に校内の先生方、それから地域の皆様、介助して下さる先生方に支えていただきまして、本当に満足感いっぱい、自信を持って巣立っていったのを思いますと、教育というのは人と人のつながり、心と心のつながりが大事なんだなということを改めて本当に勉強させていただきました。

今回、私のような者を呼んでいただいたんですけれども、現場で私が常日頃感じております問題が2つございます。

1つは、特別支援教育なんです。四、五年前から発達障害のお子さんが通常の学級に、文科省の調査で6.3%という数字ですから、40人クラスなら3人、4人、多いところでは5人いるんですね。ADHD、LD、高機能自閉症の方々なんですけど、そういう子供さんを抱えながら先生方はもう授業をしていかなければならない。しかし、研修する暇はない。なかなか非常に難しくて、そういう中で学級崩壊になってしまうというケースもありますので、現場側の先生方、非常にお忙しい中で授業をされているんですが、やはり専門性ですね。そういった、これはどう対応すればいいのか、またそういう子を抱えながら授業をどういうふうにつくっていけばいいのか、非常に具体的なアドバイスとか、専門性を求めているというニーズがあるというところを非常に感じております。常駐のそういう専門的なアドバイスをしていただける方が本当に必要になってきていると思います。

もう一つは、今、何人の先生方からもお話が出ていましたが、団塊の先生方が退職を迎えられまして、若手教員がどんどん入ってきております。うちも25人おりますが、半数が、経験が5年以下になっていきます。これが10年後はどっと抜けまして、平均年齢34歳ということをお聞きしたことがございます。本当に現場は危機感を持って若手教員の育成に取り組んでおりますし、教育学部の大学の先生方をお願いしたいことは、現場で使える指導技術、学習指導要領の読み込み、もう本当に明日から現場に立つという指導法を学び、いろいろな指導法を教えていただいたり、教育実習も済ませてはくるのですが、やはり集団を統率する統率力ですとか声のかけ方、黒板の書き方、席をどんどん離れてしまうわけですよ、そういう子を抱えながら、では授業をどうする、そういった具体的な指導技術を教えていただきたいし、現場の研修の在り方も、今までは座学中心だったんですが、もう私は教室へみんなが行って、校内の先生方が教室へ行って、どこへ立ったらいいんだろう、どういう声のかけ方をしたらいいんだろう、どういう板書を書いたら、そういう具体的で実践的な研修の在り方へ変えていく本当にもう転換期に来ているなということを感じております。

人間力という言葉が盛んに今現場で使われるようになってきているんですが、一番最初に申し上げました心と心の部分、人間と人間の部分をお若い先生方も本当に分かっていたきたいし、それを私たちが今は言葉に出して教えてあげなくては、指導技術、指導法だけではもう授業ができない。子供の心の痛みが分からなくては本当に教育はできないんだというところを御理解いただきたいなと思っております。

また御指導いただきながら、何かお役に立てればと思っています。よろしく願いいたします。

安西座長 ありがとうございます。

それでは、田村委員、お願いします。

田村委員 ありがとうございます。

このたびは、総理が再生懇談会を御計画になったということで、教育関係者は非常に喜んでおります。やはり教育に大変関心があって、熱心でいらっしゃるなということについて、我々はちょっと安心したというような感じもございます。

今、実は基本法の改正が行われまして、これは平成12年の教育改革国民会議からの長い間の議論の結果出てきたわけですが、改正が行われまして、その基本法の新しくなった改正の中に、先ほど渡海大臣がお触れになられました振興基本計画というのをつくって、それで国の教育をどうやっていくかということを実体的にできるだけ、マニフェストというのでしょうか、公にしていこうという、こういう作業が間もなく具体化されるころに来ております。

ですから、再生懇談会は非常にいいタイミングではないかと思っております。さすがだなというふうに率直に思っているところでございますが。

そこで、それで終わればいいんですけども、2つだけちょっといい機会ですので申し上げさせていただきたいと思うのですが、1つは国際性、今の若者の国際性ですね。今、菅原先生がおっしゃったように、現場には具体的な非常に大変な問題があるんですけども、教育はそればかりやっているとどうも夢がなくなってしまうものですから、夢をやはり持って、明るい気持ちで対応するというところで、そのテーマが国際性であろうというふうに思います。

具体的に言いますと、総理は既に提言されておられますが、30万人の留学生計画というのがありますが、これは私どもが具体化するには、いわゆるヨーロッパでやって非常にうまく行って、それで今ソクラテス計画という形に変わりましたが、前のエラスムス計画ですね、あれのアジア版を是非おやりいただけないだろうか。

つまり、受け入れるだけではなしに、こちらからも出すということですね。実は、それを実感しておりますのは、私どもの中高の段階だったのですが、たまたまウーという駐日大使が私どもの学校に子供さんを預けられまして、今その子供が法政大学へ行って、それからアメリカに留学にも行っているんですけども、その子がいたという関係で、ベトナムと定期的な学生交流をしております。もう5年、6年ぐらいになるんですけども、実は今年初めて、ベトナムから来るということを向こうから言い出したんです。

つまり、やはり経済発展がすごい勢いで進んでいるんだというのが実感であります。今までは全く無理だったんですね。一方的に行くだけでした。何か持って行って差し上げると喜ぶというような、そんな感じでちょっと後ろめたい気持ちを持ちながら交流していたんですけども、今度は向こうが来て交流したいと、費用はこちらで持つということ

初めて言い出しました。

ここで大事なのは、実は教員と一緒に行くんです。こちらから出すときも教員をつけているんですけども、向かうから来るときもやはり教員が来るんですね。ですから、これはそういう意味では、アジア版におけるエラスムス計画ですね。エラスムス計画が効果を上げたのは、学生と教員と両方をやったということで、そうすると何十万単位で交流ができる。しかも、長期ではなくて短期でやるという。半年とか1年でいいわけです。だから、そのかわり日本語はやらないで英語でやると。日本語はなかなか覚えてくれませんかから、来てから勉強してもらえばいいわけですから、少なくとも英語でやるという原則にして、そうすると何十万単位で交流ができる。向こうから来るやつはできるだけ向こうに持たせると、こういうことでやれば、日本の学生がアジアを通して世界に目が開ける。どうも内向きで自分の世界しか関心がない。世の中のこととか、困っている人とか、だれかを助けるという視野がなかなか育ってこないの、これは是非打ち上げていただきたい。

これは総理でなければできないことだと思います、方向性を明示するというので。30万人留学とおっしゃられたのですが、ちょうどいい機会ですから、具体的に是非ひとつ打ち上げていただけるといいなと。そのきっかけをここで申し上げられるといいなと思います。

それからもう一点、これは短く言います。実は、私は総理の御自宅のすぐそばに、野沢こども園というこども園を昨年4月開園いたしました。もう歩いてすぐのところでございますので、御迷惑をかけているのではないかと心配していますが、大変人気があるんですね。それを1年間やってみてつくづく思いましたのは、やはりいろいろな意味でもうちょっと整備していただく必要がある。つまり、子育てをするための窓口をどこか1カ所にしてほしいという親の希望があるんです。

例えば、幼稚園と保育園が一緒になっていますから、それは両方できるんですけども、最近のはやりではベビーシッターを使いたいと。これはこども園は窓口になれないんです。全然違うところにあるんですね。子育てについて必要なことが全部そこにまとまっていれば、使う側してみればすごい便利なんですね。私はもう細かなことでいろいろ、今、具体的には2つの省が分かれていますので、具合が悪いことがいっぱいあるんです。それは時間がないから言いませんけれども、とにかく一緒にするというのをただで随分違うのではないかと。子育てに対して見通しが立つと思うんですね。

0歳、1歳はやはりできるだけ親が見たほうがいいと思うんですね。これはまた別ですけども、少なくとも2歳からは預けようと思ったら預けられるという体制を日本の国として用意しますと、子育てを一生懸命やる。もともとやりたいわけですから、そのためのいろいろな障害を排除するという、これは重要な、先ほど総理御指摘になられた就学前教育の問題につながりますので、是非ひとつ。

今回、その2つを私としては申し上げて、最初の御説明にさせていただこうと思いましたが。

ありがとうございました。

安西座長 2つの省庁というのは文部科学省と厚生労働省。

田村委員 はい、そうです。どちらがいいとは言いませんけれども、教育の立場で言うと、やはり文科省かなと思うんですけれども、それを強く言うと怒られますので、今は言いません。

町村官房長官 「子供庁」と言っている人もいますね。

安西座長 そうですね。「子供庁」という、そういう。

田村委員 「子供庁」ができれば一番いいと思いますね。それができるのかどうか、お役所のことですから、よく分からないんですけれどもね。

安西座長 それでは、野依委員、お願いします。

野依委員 教育再生会議は1年4カ月で、お手元の4つの報告をまとめさせていただいたわけです。私は大学に長くおりましたので、高等教育が専門であるわけですがけれども、全体的に申しまして、最も強調したいと思えますことは、教育をする側の論理でなくて、子供あるいは若者一人一人の立場に立って教育するということが一番大事だろうと思えます。

まず、しっかりとした基礎学力と、それから規範意識、これはもう不可欠です。それから同時に、人々の能力も将来の目標も極めて多様になっているというのが現状ではないかと思えます。教育というものは、引き受けた子供あるいは若者の将来を見極めて、それぞれに必要な力を高めた上で、その先の多様な進路に送り出すということが仕事だろうと思えます。

しかしながら、現状は、古い体質の教育体制が激変する社会の要請と全く乖離していると思っております。それからまた、形式的に年齢だけで進級させるような履修主義、あるいは推薦入試の名による高校生の青田買い、それから大学院におきましては学部学生の大学院への囲い込み、こういったことが顕著でありまして、様々な議論がなされてまいりましたけれども、教育される若者ではなくて、大学あるいは学校、教員の都合でいろいろな議論がなされてきたように思っております。

しかし、現在の今日の教育問題の解決というのは、先ほどもございましたけれども、学校あるいは教員のみには押しつけてはならない問題だろうと思っております。私、先ほどの篠原委員の御発言に大変共感を覚えるものであります。家庭教育が何よりも大事だということですが。

そういったことで、学校あるいは家庭のみならず、地域社会とかあるいは企業、官庁、メディア、あらゆるセクターがやはり教育の当事者としての自覚を忘れてしていると。時には非教育的でさえあるというふうに思います。その結果、学際、国際、社会際という「際」に非常に大きなひずみが生じていて、本来は教育のプロとして任務を全うすべき先生方が、それらの対応に追われていて、忙殺されている状況があるだろうと思っております。

したがって、総理もおっしゃいましたことですがけれども、教育の再生の実現には、社

会総がかりということが是非必要だろうと思います。そして、教育現場に求められることは、社会の動向を見据えたマネジメントの確立と私は思っております。先ほどもございましたけれども、現場の先生方は本当に相当しっかりやっけていらっしやると。ですから、経営を初め社会との接点にかかわる様々な業務は、プレーヤーたる先生方に転嫁するのではなくて、むしろフロントたる教育委員会あるいは大学の経営者、経営組織が全うすべきで、各主体の責任と権限を明確にして、開かれたマネジメント体制への格段の強化が私は必要だろうと思っております。そして、先生方を本来の教育に専念できる環境に戻すことが先決だろうと思っております。

先だってまでございました教育再生会議は、主に教育に外からかかわっていらっしやる各界の有識者で構成されておまして、その議論には莫大なエネルギーが投入されたと思っております、社会一般の教育に対する大変強い期待と、それから厳しい見方の反映のように私、受けとめております。

天然資源に乏しい日本が生き抜くため条件というのは、私は諸外国に比べてやはり非常に厳しいと思っております。この国の将来はまさに優れた人材の育成にかかっていると。日本の教育というのは、世界水準を遙かに超えたものでなければ日本は生存し続けられないと私は思っております。

そういったことで、教育再生は何よりも実行が大事であろうと思っております、先ほど総理のおっしゃった各事項について、混乱することももちろんやらなければいけないことだろうと思っておりますけれども、教育再生会議が提言されたことを是非実現していただくこと、推進していただくことが大事だろうと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。私も引き続き微力を尽くさせていただく考えでございます。

よろしくお願ひします。

安西座長 ありがとうございます。

教育再生会議の座長からハッパをかけられまして、頑張らなければいけないということだと思います。

それでは、若月委員、お願ひします。

若月委員 失礼をいたします。東京品川区の若月でございます。

まずは、この教育再生懇談会にお声をかけていただきましたことをまずもって御礼を申し上げたいと、こんなふうに思っているところでございます。

ちょうど総理が小泉内閣のときの官房長官をお務めのときでいらっしやいました。構造改革特区の制度ができて、品川区はすぐにそれに手を挙げまして、今現在進めておりますいわゆる小中一貫教育を実施いたしました。当然そのとき小泉総理もいらっしやったわけですが、小泉総理がお帰りになった後、ふと福田総理がお1人でお見えになりました。そして、それぞれのブースをごらんになっていったわけではありますが、私どものところのブースにお立ち寄りくださいまして、初めは小中一貫教育とか、1つの建物の中に小学校の1年から9年まで、要するに中学校3年まで一緒に生活をする、どうもそれが余りり

アルにお感じにならなかつたような感じをしました。いや、そんなことってできるの、そんなことができたならばうれしいね、きっとそうになったら変わるだろうけれども、これを初めてやる品川区は大変だね、そしてその次に総理がこうおっしゃったんです。とにかく最初をやる人は大変だけれども、いろいろあるだろうけれども、頑張ってくださいと。その言葉に勇気づけられまして、とうとう今年までやってまいりました。品川区はおかげさまで施設一体型の小中一貫校を2校立ち上げ、そろそろ3校目を立ち上げることになっています。こうしたことも、あのかの時の福田総理の一言が続いているわけでごさいます、是非これからもよろしくお力添えをいただければなと、こんなふうに思っているところでもございます。

さて、この懇談会にお声をかけていただきまして、私もこのいただきましたリーフレット等を何度も何度も読み返ささせていただきました。このチェックリストを特に拝見いたしますと、左側の列は主に目的が書いてあるんだらうと、こう解釈をいたしました。そして、その隣がいわゆるその目的を実現するための様々な手段、方策が述べられているんだなというふうにまず読み取ったわけでごさいます。

そうした中で、例えば今盛んに、先ほどほかの委員からも御意見が出ていますけれども、徳育あるいは基本的な生活習慣、規範意識等々がいろいろ出されております。このことにつきましても、具体的な現場の先生方の道徳教育というものに対する取り組みだとか、あるいは戸惑いだとか、あるいは自信のなさだとか、そういったようなことを具体的な例を御紹介して、この目的を実現するように頑張っていきたいなと、こんなふうに考えているところでごさいます。

また、学力の向上については、これはもう言わずもがなのことであります。特にここでは、具体的な形で出せるかどうかは別としましても、私はもっと日本の国というものの将来を考えたときに、明確に科学技術立国で行くんだといったような明確なビジョンというものがやはり必要ではないだろうか。

いわゆる教育論の一般論で、調和のとれた人格の育成であるとか、もちろんそういうものは大事でありますけれども、その個人的な側面と、これからの日本といったようなものをどう支えていくのかといった、そういった視野というものも私は必要だろとうと思えます。ある1つのところに特化して目的を出しますと、とかく世間からは批判されがちではありますけれども、やはりこの国の将来を考えたときに、例えば環境技術ということを考えても、日本はこれから世界をリードしていく余地というのはたくさんあるかと思えます。そういった意味で、もっともっと科学技術で日本は生きていくんだぞと、そのための人材を育成していくんだといったようなことを、この学力の向上の中でもただ単に基礎、基本が大事ですといったことだけではなく、やはり明確に出していけたらいいなと、こんなことも考えています。

それと同時に、いわゆるゼネラリストからスペシャリストといったようなものをもっともっと日本は大事にしていかなければならないだろうと。これもどなたかが先ほどちょっ

とお話しになっていらっしゃるかもしれませんが、これも世間ではよく批判を浴びる言葉ですが、なぜエリート教育といったようなものがこうも批判されるんだろう。それがいけないのだったならば、やはり私はスペシャリストというものをつくっていかねばならない。この国の財産は人でありますから。そうした意味からも、やはりスペシャリストをつくっていくよ、これはこれからの義務教育あるいはそれに続く高等教育、大学教育等々において失ってはいけない視点ではないかなと、こんなこともこれを拝見させていただいて感じたものでございます。そんなことも、またこの会の中で意見を述べさせていただければなど、こんなふうに思います。

また、これも先ほど来出ていることでありますが、幼児教育、家庭教育の大切さといったようなこと、これはもうまさに世間が感じていることであります。また、行政の立場からいって、一番アプローチしにくいのが家庭教育であります。大事であるということは分かっているわけでありまして。幼児教育の大事さも、幼児教育の場合には行政はかなりかわりはあるわけでありましてけれども、しかしやはり日本の場合には幼児教育はかなり私学の力を負うところが多いわけでありまして、そういったところで幼児教育の大切さということもかなり言われている。

ただ、私はつくづく思うんですけれども、今、学校はかなり家庭教育に対しても、親御さんはある意味で頑張っていると思うんです。これはもう教育の問題なのか、あるいは日本社会が構造的に持つ雇用形態の問題なのか、要するにそこら辺に話を持っていかないと難しい。例えば家庭において、もっとみずからをエンカレッジしていこうと考えている親御さんもやはり第一優先の自分の仕事にそのプライオリティを奪われてしまうといったような現実がかなりある。

したがって、この家庭教育とか幼児教育というものをもっと盛んにする、充実したものにするというのは、これは親の参加を抜きには考えられません。親の参加を考えたときに、やはりそこには教育という世界だけではもう語れない部分があるのではないだろうか。

かなり行政も子育て支援でできるところまではやっています。しかし、これ以上やると、あたかもこれは日本は社会主義国家だったのかと思うぐらいまで要求が広がってくるわけです。果たしてそれでいいんだろうか、そう考えると、やはり日本の今持っている構造そのものに手入れを加えていく、教育の場からですね。こんなこともこの懇談会の中では大事なことなのかな、そんなことも機会があればお話をさせていただければなど、こんなふうに思います。

先ほど野依先生がお話くださったことで、実は私はほっとしているのですが、再生会議では大分教員がこてんこてんにやられたということもちらちらと聞きました。大分応援をしてくださった方もいらっしゃるということも聞いておりますけれども、日本の教員は世間が言うほど私は頼りなくはないと思うんです。ただ、今のままでいいとは全然思いません。全然思いませんが、日本の教員はそんなにレベルが低いとは思わない。

そういった意味で、先生方のまた大きな応援にこの懇談会がなればなど、こんなことも

願っているところでございます。

どうぞよろしく願いいたします。

安西座長 ありがとうございます。

有識者委員の皆様からいろいろもう大事な問題が多々出ておりまして、是非総理また皆様からお話しただければと思いますが。

福田内閣総理大臣 どうもありがとうございました。いろいろお話を伺いました。

教育というのはだれでも話ができるんですよね。教育、政治、外交、これはだれでも意見を持っているんですよ。そういう意味においても、教育というのはその中でも非常に話しやすいテーマだろうと思います。

そういうことでございますので、私も正直言って専門家でないので、どちらかというところ、自分の体験から話をするということが多いんですけれども、そういう意味において、昔と今とどう違うのかなんてというようなこともよく考えるんですね。

私の世代の方もいらっしゃるんですけども、昔と今は随分違いますよね、昔の教育、今の教育。昔はそんな丁寧に扱ってくれなかったですよ。もう大ざっぱに、むしろ乱暴にというふうなことでありまして、私どもの頃は特に戦争の終戦前後の小学生ですから、終戦後の物のないころでありましたので、教科書も回し読みというか、上の人のお古を使った。だから、教科書は大事に扱いなさいと、こういうことが絶対だったのですね。だから、表紙をかけて書き込みなんかもしないで、そしてまた下級生に渡すと、こういうふうなことをしました。

それから、先生も相当ひどい先生で、学校に行くと小説本を読んでくれて、それはそれで楽しいんだけど、1日読んでくれたりしてですね。しかし、ああいうところで小さいながら、私はやはり人間と人間の触れ合いみたいなものを感じました。そういうことは今でもよく思い出し、そしてあのときあの先生はああいうふうなことを言ったけれども、こういう意味だったんだななどというようなことを懐かしく思うこともありまして、これは何も字を覚えるとか、そういう以外の得るところ、これが私は特に小さいときの教育の大事なところではないのかなというふうに思いますので、そういうところを忘れて、ただただ読み書きだけというふうなことではいけないのではないかなと思います。

それから、今ちょっとお話がございました、今の先生は質が悪いんだとかいろいろ言いますけれども、それは比較すると、良い悪いはあるかもしれないけれども、しかし生徒はそんなことお構いなし、その先生を信ずるわけですから、信じて初めて教育はできるというふうにも思いますし、大体いつの世でも、先生はそんなにいいという評価はないですよ。

例えば、正岡子規なんかの「坂の上の雲」の頃のことですけれども、当時も今の学校の先生はだめだと、あれで教育者かみたいなことの評論なんかあるんですね。100年前ですよ。ですから、いつの世でもそういうことはあるだろうと思います。

ですから、理想を追い求めたってこれは無理ですよ。そんなことを求めるのではない

というものと私は思いますので、理想を追い求めて失望するよりは、これがいいんだということで信じていくということのほうが教育の場合にはよほど大事だと、そんなふうに思います。もっと先生方、自信を持ってやっていただきたい。

しかし、菅原先生のお話を伺ったら、発達障害の方が6%いるということになると、これはよほど大変だなと思います。一人一人を大事に扱わないと批判を受けるというのが今の先生でしょう。物すごい批判のあらしを覚悟しながらやっておられるというふうに思いますけれども、そういうような先生を守るということも私は必要なのではないかなというふうに思います。そういう中で、先生自身も守られながらやっているんだという中で、より良い先生になるような気がしますね。批判して良くなりませんよ。今、公務員批判されていますよ。政治家はもっと批判されていますけれどもね。そういう中で良くなればいいんだけれども、批判されて悪くなることもあるんです。ですから、それはやはり褒めたりしかったりというのが大事なんだろうというふうに思いますので、そのバランスをうまくとるということではないかと思います。

私は、これから教育の目標というか、そういうものは、先ほど若月先生がおっしゃったように、やはり人なんですよね、日本は。日本は人でもって行くわけでありまして、これはそういうことでずっと努力をしてきたというお国柄ですから、ですからこのことは今後も忘れることはできないことだというように思います。

ただ、やはり少しでも倫理性の高い人を育てないと、せっかく得た知識を悪用することになりますので、そういう人を育てることはできないと思います。このことはとても大事であり、そしてまたそういう倫理性の高い人を育てるためには社会が、これも何人かの先生方からおっしゃられましたけれども、その社会が、これがしっかりしていなければいけないということであり、社会を構成する家庭も、これもしっかりしなければいけないということでもあります。

家庭の問題も御指摘ありましたけれども、家庭もいろいろ問題があると思います。先生は教室のお子さんを教えるよりはお母さんを教えたいと、こういうふうに思っている先生が多いという話も聞いていますよ。

ですから、そういう基本的なところが今ちょっと欠けている部分があるので、そちらのほうにもスポットライトを当てる必要があるんだというふうに思ひまして、社会全体が良くなって初めて、子供の良い教育も安心して受けさせることができると、こういうことではないかと思いますので、池田さんにも先般申し上げたところでありますので、そういうことも含めて、ひとつよろしくお願ひしたいと思います。

それから、篠原さんが、英語をやるよりは日本のことと、こういうふうに言われましたけれども、一言申し上げますけれども、日本語はもちろん大事ですけれども、しかし並行して英語をやったって、日本の子供は両方きちんとできると思いますよ。教育次第だと思いますよ。ですから、決して国際化を無視しないで、やはり日本が将来もっと世界に羽ばたくというためには、国際語も十分駆使できる人材を養成しなければいけないと。特に

英語ですよ。今、アジアへ行ったって、どこへ行ったって英語は通用します。今や英語は国際語ですから、これはもう否定できないです。

ですから、これは日本語と同じように、国際語である英語はしっかり身につけるということは、将来の子供が羽ばたくチャンスを与えることだと、こう考えていただきたいと思います。

篠原委員 そののところは、異論ございません。

福田内閣総理大臣 よろしく願いいたします。

篠原委員 一言だけいいですか。

国際化とか、語学を、英語教育をとということ、これはこれで大事なんですけども、それで国内のことはどうでもいいみたいな感じにならないように注意しなければいけないということを行っているんです。やはりそこはちゃんと基礎として、国語を含めて日本のことをよく教えていくことも同時に必要だと思うんです。そこが抜け落ちて国際化というのはなかなか難しいのかなと、こういう意味で言ったんです。

福田内閣総理大臣 日本国内に住んでいる子供たちはみんな日本語うまいはずですよ。日本の文化にもなれ親しんでいるし、それが日本人ですよ。あとは親がどうするかということもありますけれども、それは国際化に相当力を入れてもいいと、日本人であることには変わりないと私は思っております。

安西座長 ありがとうございます。

総理は教育者でいらっしゃるということがわかりました。

しかると伸びない、しかるよりも、褒めると伸びるとするのはそのとおりだな、大人でもそうだなと思いますので。

田村委員 そのとおりですね。本当にそこがポイントですよ。

池田委員 企業におきましてもそうですよ、やはり。

安西座長 ありがとうございます。

官房長官、文部科学大臣はいかがでしょう。

渡海文部科学大臣 話をし出すと長くなると思いますので、細かいことは言いませんが、私は今のお話を聞いていて、一つやはりそうなんだというふうに思ったのが野依先生の発言でございまして、個人の名前を言って恐縮でございしますが、要は与える側の論理ではなくて、受ける側の論理でやれと。

これは総理には恐縮でございしますが、福田内閣、総理の消費者目線とおっしゃっているのも、私はそういうことだというふうに思っております。受ける側がどう感じているか、どう感じれば、例えば褒めれば育つというのも、どちらかという受ける側の論理だと思うんです。今までのいわゆる文教政策は、どちらかという、ちょっと与える側に少し目を奪われていたかなというふうな思いで今聞かせていただきました。

そういった面で、これは全般にわたっての話だと思いますので、そういった目線というのは非常に大事だというふうに改めて気づかせていただいたという点がございします。

それから1点、少子化の問題と教育投資の問題が、これは小川先生から出ましたが、今一番頭を痛めている話でございまして、すぐOECDと比べて何とかとか、これは文部科学省もすぐそういう論理を展開するわけでございます。私は別に文部科学省に縛られているわけではありませんが、そういうことで本当に教育投資というものが語られていいのかなというのは、最近非常に私自身もよく分からなくなっていて、要はやはり家計負担でどの程度までが許容できて、それが足りないとするならば、やはりこれは国がある程度何らかの形でやる。だめなら税制で、例えばアメリカの大学が持っているような、特に高等教育ですね、やはり基金を積むとかいうふうに考えていかないと、ただ単にあちらに比べてこうだ、こちらと比べてこうだと言っている、これは正直余りつまらないなど。大学の経営者もいらっしやいますから、どういうふうに思われるかわかりませんが、最近そんな気がしております。

ですから、やはり日本の教育というものをどの水準まで、世界で最高にしなければいけないという発言もありました。しかし、それ以前に、最低でもここまで持っていかなければいけないんだという議論があってしかるべきかなと、そういう気がいたしております。

それで考えたときに、その教育投資というものを一体どう考えていくのか。ただ単にお金を出せば、ふやせばいいんだということでもないと思うんですね。そういうことも考えた上で、ちょっと財務省みたいなことを言いますが、非常に厳しい財政の中でどういう考え方をしているのか、これは我々非常に悩んでいるところでございまして、またそういうことについてもいろいろな御意見をいただければありがたいな。

それも単なる海外との比較ということではなくて、やはり我が国の在り方というものが当然あっていいと思っていますから、また是非そういう意見もいただければありがたいと思っています。

安西座長 ありがとうございます。よろしゅうございますか、長官。

町村官房長官 先ほどの菅原先生を初め、学校の現場におられる方々もたくさんいらっしやるわけですが、やはり先ほど小川先生が言われた学校の実態とか子供の実態をよく見て考えないといけないというのは、本当に改めてそのとおりだなと思うんです。ややもするとどうしても教育論は観念的になって、どうも最近の子供たちはああだこうだという議論になりがちなんですけれども、本当にそうなんだろうかなというふうに思うことが最近ありますので、できる限り、今、子供達はいろいろな子供達がいるにしても、現場がどうなんだということを是非教えていただき、またそれから出発しているいろいろな議論ができたらいいいのかなと。それが今、渡海大臣が言われた、与える側から見のではなくて、受ける側から見るとということにもきつとつながるんだらうという気がしております。

それと、本当に多くの方々が、奇しくもかもしませんが、家庭教育とか幼児教育のことをこれほど皆さん強く認識しておられるというのは、ある意味では驚きであると同時に、大変心強くも思っているところであります。

私も文部大臣のとき、家庭教育について、何かできないかと思って考え家庭教育手帳と

いうのを作った。中身はそんなの当たり前だよということしか書いていないんですよ。朝御飯は家族と一緒に食べようとか、朝、起きたらみんなでおはようと家族で言い合おうとか、そんなこと文部大臣に言われなくたって分かっているわいとみんなから言われたのですが、それでも、どうやってそれを渡すかということ、渡し方に少し工夫をして、今でもやっているかどうかわかりませんが、母子手帳を渡すときに、一緒にそれをお母さんに渡す。

田村委員 皆さん使われています。

町村官房長官 ああ、そうなんですか。

それとか、就学前健診とか、いろいろな機会に渡すと。

多分、家庭教育に少し政策的なことをやったのはあれが最初だったのかなと思うのですが、でもそこから先へどんどん行くと、それはプライバシーだからいけないんだとか何とか難しいんですね。でも、これだけ皆さんが危機感を持っているんですから、何か新しいまた家庭教育の知恵がこの場から生まれてきてほしいなと、今しみじみと皆さん方の話を聞いて思ったところでございます。

いろいろな提言は本当に既にたくさん出されておりますし、この野依先生の教育再生会議の提言もそうですし、ちょっと前、私も事務方をしておりましたが、田村先生もそのときメンバーでいらしゃった、江崎先生の教育改革国民会議もそうでした。あるいは、中教審等々の提言もそうですが、あとはそれをどう実行するかということなのかなと思います。

全部一遍にできないかもしれない。それでも、是非これをやろうよというお話があれば、結構教育再生会議の中でも実行に移されたことが数多くありますから、そうそう捨てたものではないと思っておりますので、積極的に、これだけは是非というのを言っていれば、それをまた実現していくのが福田内閣の使命であろうと思っておりますので、よろしく願いいたします。

最後に、先ほど「子供庁」という話が出ましたが、今は消費者庁と言うかどうかわかりませんが、消費者行政の一つのきちんとした組織をつくろうという話がありますが、私は十数年「子供庁」というのを言い続けておるのでありますが、今、田村先生から力強い御発言があったので、そう簡単にできるとは思いませんが、大切な論点であろうと改めて認識したところです。

田村委員 今、十幾つのところが分担しているんですね。大きくは文科省と厚生労働省ですけれども、どんどん広がっていますから、是非統一しないと、親が非常に不便ですね。

安西座長 ありがとうございます。

総理の先般の施政方針演説を配っていただいております、総理が人づくりが大切だということをおっしゃっていましたが。

福田内閣総理大臣 これはさっき若月委員からお話がありまして、どういう例えば環境とか、5つ目指す方向というのを書いてあります。その中で、3番目が、国民が豊かさを実感できる活力ある経済社会の構築、この中を見ていただきますと、技術革新、それも革

新的技術創造戦略といったようなことが書いてございます。

それから、第4が地球規模の、これは外交ですけれども、第5は地球温暖化対策ということで、そういうものを目標にしているということで、先取りさせていただきました。

安西座長 明日を担う人材の育成というのもしっかり入っておりまして、教育の再生に取り組むということも明言されておられます。

それでは、ありがとうございました。

私も、こういう大変有意義な懇談会でございますので、微力を尽くさせていただければと思っております。

今日は大変貴重な御意見をいただきまして、また総理の貴重なお話もいただき、官房長官、文部科学大臣にもコメントをいただきまして、今日いただいた御意見も踏まえまして、今後の懇談会を進めていければと思っております。

ありがとうございます。

それでは、最後に山谷補佐官から何かございますでしょうか。

山谷総理大臣補佐官 本日はありがとうございました。

今回は、教育再生会議報告のフォローアップと、本日の御意見を踏まえまして、少し幾つか個別のテーマというのを絞った形で御検討いただいておりますので、また日程等々、後日、事務局より御連絡をさせていただきたいと思っております。

また、今後、教育再生会議のフォローアップのために、教育現場の視察も実施したいと考えておりますので、御協力よろしくお願いいたします。

ありがとうございます。

安西座長 ありがとうございました。

総理にもお忙しいところ、まことにありがとうございます。是非総理のリードのもとでこの懇談会が成功しますように、よきチームワークを持って進んでいければと思っております。

本日は御多忙のところ、皆様、ありがとうございました。

- 了 -